

途上国の手仕事伝承に世界が討論

第二回「国際校り会議」は、昨年十二月三十一日から今年一月四日まで、インド・アーメダバード市内のインド国立デザイン大学（NID）で開催された。参加者は世界二十一个国家から染織研究者、アーチスト、テキスタイルデザイナー、業界関係者らに加え、現地の学生ボランティアなどを含め四百二十六人。発展途上国での校り産業生き残りを主題に討議するとともに、展覧会、講習会などを実施した。その成果を、有松での報告会からまとめた。

△第二回会議の趣旨▽

国際校り会議は、第一回が九二年十一月、校り染め産地の有松・

第2回国際校り会議

鳴海を中心に名古屋で開かれ、その後の同産地のデザインハウスとの取り組みなどのファッショ分野をはじめ、製品開発の新しい方向性に大きな影響を与えた。

第二回をインドで行った趣旨を、同会議実行委員長のヨシコ・イワモト・ワタさん（米・カリフォルニア大学バークレー校研究員）は、「前回は先進国での会議

ンデシア除く」とした。

△開催地側の熱意▽

この思想を、インド側は熱烈に歓迎した。開催支援体制として、インド側はNIDが主催団体構成メンバーとなり、会場提供や運営の墨子的役割でも全面的にバックアップ。さらに、政府や財界も積極的に支援。マハトマ・ガンジーの「手紡ぎ運動」の後継者で、イ

現地の職人による校りの実演



開催期間中、現地側から最も高い関心を示されたのは、日本から

世界の市場拡大へ布石（日本）

インド（アーメダ）に426人参加

だったが、校りは世界中のいろいろな文化、民族が持っている技術。それぞれがこれからの伝承に、課題を抱えている。だから、会議をまだ手仕事の技術が、（生活に密着して）残っている発展途上国でしないのは片手落ちと説明する。

途上国でこそ、技術保持者が、研究者が考えている伝統産業の未来像や、他国の手法・先進的技術などを知る機会が少なく、会議の成果もより有効だと考え方。このため、会議参加登録者もインドと周辺のインド文化圏諸国からの人を、約半数の百二十五人（ボラ

ンドのハンドクラフト界の精神的支柱という、プブル・ジャカル女史が開会式に駆けつけるなど、「伝統産業、テキスタイル産業の振興を、国を挙げての課題ととらえているインド側の熱意」（同）を象徴した。

こうした現地の反応は、日本から参加した有松・鳴海産地の代表団にも、「同じ手仕事の産業に携わるものとして勇気付けられた」（竹田浩巳ワールド・シボリ・ネットワーク幹事長）竹田嘉兵衛商店社長」と、感動を与えた。

ハイテク校りの講演会（中央が新井淳一氏）



△ハイテク校りへの関心▽

の参加者が最終日のワークショッブ（実技講習会）で紹介したハイテク校りだった。テキスタイルデザイナーの新井淳一氏や有松・鳴海産地の染色加工業者・久野剛氏が化学技術を応用し、現代的なファッションテキスタイルとして再生した校りの技術だ。

新井氏の提案は、群馬県糸糸事業協会との協力で試作を進めている技術。アルミニウム蒸着したポリエスチルフィルムと高級絹糸を交織。これを校りで防染して酵素溶剤で処理すると、防染されアルミが溶けない部分は硬く、形状固

定される。溶けた部分は、絹糸も溶けポリエスチルのみのオーガンディ状になり、生地に独特の表情を作り出す。

△最先端技術とローテクの融合▽

「計算不能な美しさを持つ新しいテキスタイルが生まれる。新井さんは「メルトオフ（溶変）」と呼んでいる」（ワタさん）という。

久野氏は、アルカリ溶剤での植物繊維のシュリンク応用したものと、イッセイ・ミヤケの開発によるポリエスチルのヒートセット技術による、校りの形状固定技術を紹介。校りを「手のぬくもりが残る表面効果素材」の技術として、とらえ直したものだ。

△会議の成果▽

ワタさんは「インドの職人は、過去に下層カーストとされ地位が低かった。今回の会議で初めて、世界的な研究者、デザイナーなどと、対等の立場で交流できたことは、非常に大きな意義」と話す。

竹田氏は「世界の参加者と個人的交流が深まる。いま世界のデザイナーが、日本の校り技術、ハイテクとの融合に注目しており、こういう場を通じて、世界にマーケットが広がる基礎になる」と期待している。

次回開催は未定だが、九九年九月にはチリ・サンティアゴ市での展覧会、シンボジウムなどを実施する。